

【巻頭言】

あの頃の山陰本線

編集委員長 小松 龍一(63 回生)

京都医療科学大学がある園部町は、京都から 35km 離れたところにあり、鉄道なら JR 山陰本線に乗り 40 分ほどである。

私が学生の頃、1986 年当時の山陰本線は現在の様子とずいぶん違っていた。蒸気機関車が走っていたわけではないが、駅舎も列車も鉄錆が至る所にあつて、普通列車は田舎のローカル線みたいに一駅一駅ゆっくりと走っていた感じであった。駅舎や列車がそうであったように、乗客も昭和の古き良き時代の人情がちらほらと残っていた。



列車は電車ではなくディーゼル車で、客車内はあちらこちらで煙草の煙が立ちのぼり、座席は埃っぽかった。夏の暑い日は天吊りの扇風機を回していた。窓を開けたままトンネルに入ると、ディーゼル燃料の臭いが車内に入り込んできた。冬になると車内温度を保持するため扉の開閉は手動になり、ホームに列車が到着して扉が開くのを待っていると、後ろに並んでいる人から「兄ちゃん、自分

でこうやって開けるんや」と言われたりした。レールは単線で、対向列車の待ち合わせが頻繁で、毎朝乗っていた列車は保津峡駅で 9 分間上り列車を待ち合わせた。その間私たち乗客は売店も何もないホームに降り、煙草を吸った。乗客は眠りに落ちると無防備に気を抜いていた。となり座席の女性は私の読んでいる本に長い髪がかぶさっても一向に目を覚まさない。仕事に精を出して疲れた若い会社員は立ったまま居眠りをして、崩れるように私に寄りかかり、私の胸に顔が曲がるほど頬をべったりくっつけていた。私に話しかけてくる高校生もいた。今では考えられないことだが、ただ何となく「お話ししましょう」と囲まれたこともあったし、「元気出して」とチョコレートをもらったこともあった。女子高校生に煙草をせびられたこともあった。また、猛勉強して臨んだ期末試験直後、くたびれた顔をしていた私に「人生あきらめんなよ、がんばらんかい」と声をかけてくれた肉体労働者風の男性。「虹がきれい、ほらほら」とはしゃいで私の袖を引っ張った老婦人。魚の干物か何かを入れた箱をいくつも背負った行商のご婦人。人懐っこく、人間っぽくて朗らかな人たちであった。



現在、山陰本線は一部路線変更し、電化され、複線化され、走行時間も短くなった。全車禁煙で清潔感も増した。多くの駅舎は新築され、自動改札機が設置され、駅員に定期券を見せなくてもよくなった。乗客が増え、車内の雰囲気もずいぶん変化した。いわし竹輪を頬張る行商のご婦人やスルメをかじりながらカップ酒を飲む労働者は見かけなくなり、床に座り込んでペットボトルをあおる高校生や疲れが滲み出ているサラリーマンが目につくようになった。

園部の駅舎も新築された。周辺の建物も新しくなり、建物が取り壊された場所は広い駐車場になっている。通学に便利な西口ができ、バス停、ロータリーがある。西口からは、本学のために設置したとしか思えない高圧電線の鉄塔と変電所、小さな神社の鳥居、巨大な杉の木が見える。桜が咲く季節は、そよ風が清々しく、山の新緑が芽生え、ヒバリがさえずり、空が透きとおる。園部駅周辺の静かな雰囲気は私が学生の頃とほとんど変わらない。



駅から 150m ほど坂を登れば本学に到着する。あの頃山陰本線に出逢った人たちと一緒に通った学友たちのことを、本学に向かうゆるやかな坂道を登りながら思い出していた。

以上